

東京大学駒場博物館特別展示

トリニティ・カレッジ・ダブリン=東京大学
学術協定締結記念

W. B. イェイツとアイルランド

<作品解説・年表・参考図書>

東京大学イェイツ研究会

監修 中尾まさみ

はじめに

東京大学教養学部駒場博物館では、このたび本学とトリニティ・カレッジ・ダブリンとの間に学術協定が締結されたことを記念して、アイルランドを代表する詩人・劇作家ウィリアム・バトラー・イエイツと彼の祖国アイルランドについての展示を開催します。イエイツの生きた時代のアイルランドは、政治的にも文化的にもかつてないほどの激動と変化を経験しました。その時代を呼吸し、また自らそうした動きに多大な影響を及ぼしたイエイツの創作活動と生涯は、この時期のみならず、現代に至るアイルランド文化・社会のありようを考える上で、重要な示唆を与え続けています。

イエイツはまた、日本の能に触発され、独自の演劇作品を残したことで知られていますが、一方、わが国では、上田敏、芥川龍之介、西條八十、菊池寛などの文学者によって同時代の詩人・劇作家としていち早く翻訳、紹介されており、日本との関わりの深い文学者でもあります。

本展では、アイルランド国立図書館で開催され、高い評価を受けている「W. B. イエイツ——その生涯と作品」展をもとにアイルランド政府が製作した13枚のパネルと、同図書館、ダブリン市立美術館および東京大学図書館の資料を中心に、イエイツの文学者としての軌跡と同時代のアイルランド、そして日本での受容について展示しています。会場ではまた、原詩テキストと高松雄一氏による日本語訳（岩波文庫『対訳イエイツ詩集』）に本研究会で簡単な解説をつけたものも展示し、実際に詩に触れていただくことにより、イエイツの文学世界の豊かさを味わっていただこうと考えました。本冊子は、この作品解説、年表、参考図書をまとめたものです。この展示を通してイエイツやアイルランドに関心を持たれた方のお役に立てば幸いです。

東京大学イエイツ研究会

- * 解説で引用したイエイツ作品の訳は、「市立美術館再訪」を除き、すべて上に挙げた高松雄一氏によるものです。使用を許可してくださいました高松氏と岩波書店に厚く御礼申し上げます。

目 次

はじめに

年表 1

作品解説 9

‘The Stolen Child’ 「さらわれた子供」 9

‘Down by the Salley Gardens’ 「柳の園に来て」 10

‘The Lake Isle of Innisfree’ 「湖の島イニスフリー」 11

‘The Wild Swans at Coole’ 「クールの野生の白鳥」 12

‘An Irish Airman Foresees his Death’ 「アイルランドの飛行士は死を予知する」 13

‘The Fisherman’ 「釣師」 14

‘Easter 1916’ 「1916 年復活祭」 15

‘Sailing to Byzantium’ 「ビザンティウムへの船出」 17

‘In Memory of Eva Gore-Booth and Con Markiewicz’

「イヴァ・ゴア＝ブースとコン・マーキェウイツの思い出に」 18

‘Byzantium’ 「ビザンティウム」 20

‘Lapis Lazuli’ 「ラピス・ラズリ」 21

‘The Municipal Gallery Revisited’ 「市立美術館再訪」 22

‘Why should not Old Men be Mad?’ 「老人どもが怒り狂わずにいられるか？」 25

‘The Circus Animals’ Desertion’ 「サーカスの動物たちは逃げた」 26

参考図書

—— イェイツとアイルランドについてもっと知りたい方のために 28

年（歳） ウィリアム・バトラー・イェイツ関連

- 1865 (0) 6 月 13 日、ダブリン郊外のサンディマウントにて誕生
- 1867 (2) 7 月 父ジョンの美術学校入学のため一家でロンドンに移る
- 1869 (4)
- 1870 (5)
- 1872 (7) 7 月 生活困窮のため、父はロンドンに留まり、残りの一家はスライゴーに移る
- 1874 (9) 10 月 家族全員でロンドンに移る
- 1877 (12) ゴドルフィン校に入学
- 1879 (14)
- 1880 (15) 「土地戦争」により父の収入が減少
- 1881 (16) 生活困窮のため、一家でダブリン郊外のハウスに移る
エラスムス・スミス・ハイスクールに入学

アイルランドなどの歴史（ [角括弧] はアイルランド外の出来事）

- 2-3 月 フェニアン団、共和制実現を謳い反乱を起こすが失敗
[11 月 日本で大政奉還]
- 7 月 アイルランド国教会制が廃止され、イングランド国教会系のチャーチ・オブ・アイルランドも他宗派と平等の扱いとなる
- 5 月 アイザック・バットにより自治（ホーム・ルール）運動が始まる
- 8 月 グラッドストン政権下で最初の土地法が成立
- [4-5 月 パリで印象派展]
- この頃、自治運動の指導者として穏健な手法をとるバットに代わり、チャールズ・スチュワート・パーネルが台頭
- 10 月 マイケル・ダヴィットによりアイルランド全国土地連盟が設立、公正地代、借地権の安定、借地権の自由売却といった要求（「3F 要求」）の実現を目指し活動
- この頃から地主側に対して小作人側によるボイコットや暴力を伴う「土地戦争」が始まる
- 5 月 パーネル、アイルランド議会党の党首に就任
- 8 月 グラッドストン政権下で第二次土地法が成立

- | | | |
|-----------|---|--|
| 1882 (17) | この頃から詩を書き始める | |
| 1884 (19) | メトロポリタン美術学校に入学、ジョージ・ラッセルと出会う | 11 月 ゲール運動競技協会（GAA）設立 |
| 1885 (20) | 3 月 イェイツの詩、初めて雑誌（『ダブリン大学評論』）に掲載 | 12 月 英国総選挙の結果、単独過半数を得た政党がなく、パーネルの議会党がウェストミンスター議会の決定票を握ることとなる |
| 1886 (21) | 詩人として身を立てることを決心 | 6 月 グラッドストン政権下で初の自治法案が提出、下院で却下される |
| 1887 (22) | 5 月 一家でロンドンに移る | |
| 1888 (23) | この頃からウィリアム・モリス、バーナード・ショー、オスカー・ワイルドなどと交わる
神智学協会に入会 | |
| 1889 (24) | 『アシーンの放浪その他の詩』出版
1 月 モード・ゴンがイェイツの実家を訪問 | |
| 1890 (25) | ライマーズ・クラブを結成
黄金の夜明け団に入会 | この年、パーネルとオシー夫人とのスキャンダルが問題となり、議会党が分裂 |
| 1891 (26) | 8 月 モード・ゴンに初めて求婚 | 10 月 パーネル死去 |
| 1892 (27) | 詩劇他『キャスリーン伯爵夫人とさまざまな伝説と抒情詩集』出版 | 11 月 ダグラス・ハイド、「アイルランドの脱イングランド化の必要」について演説 |
| 1893 (28) | 散文集『ケルトの薄明』出版
『ウィリアム・ブレイク作品集』編纂（エリスと共同）、出版
オリヴィア・シェイクスピアと知り合う | 7 月 ハイドらがゲール語連盟を設立
9 月 グラッドストン政権の第二次自治法案、上院で却下 |
| 1895 (30) | 最初の詩集として『詩集』出版 | |

1896 (31)	4 月 レイディ・グレゴリーと知り合う 12 月 パリでジョン・ミリントン・シングと知り合う	5 月 ジェームズ・コノリー、アイルランド社会共和党を結成
1897 (32)	短編集『神秘の薔薇』出版 クール荘園での夏期滞在始まる	
1898 (33)		ユナイテッド・アイリッシュメンによる蜂起の百周年
1899 (34)	パリでモード・ゴンに求婚 3 月 アイルランド文芸劇場の初公演で『キャスリーン伯爵夫人』 詩集『葦間の風』出版	[10 月 第二次ボーア戦争勃発、イギリスが多大な犠牲を払い勝利 (1902 年 5 月)]
1900 (35)	母、スーザン死去 (享年 58 歳) 詩劇『翳深い海』を出版	1 月 分裂していた議会党、ジョン・レドモンドの下で態勢を立て直す
1902 (37)	4 月『キャスリーン・ニ・フーリハン』でモード・ゴンが主演 アイルランド国民演劇劇場を結成 妹スーザンとエリザベスとがダン・エマー・インダストリーズ (後のクアラ・プレス) を設立	ロバート・エメットによる反乱の百周年
1903 (38)	2 月 モード・ゴンがジョン・マクブライドと結婚 詩集『七つの森で』、評論集『善悪の概念』出版 11 月 アメリカ、カナダへ初の講演旅行 (～翌年 3 月)	8 月 バルフォア政権下でウィンダム土地法が成立、小作農の土地購入のために英国政府が大幅な助成を行う
1904 (39)	国民的劇場としてアビー座を開設 フローレンス・ファーとの恋愛	
1905 (40)	散文集『赤毛のハンラハンの物語』出版	11 月 アーサー・グリフィス、シン・フェイン党を結成 (「シン・フェイン党」となるのは 1908 年 9 月)
1906 (41)	『詩集 1899–1905 年』出版	

- 1 月 自治法案への反対派がアルスター義勇軍を結成
- 8 月 ダブリンで ITGWU が大規模ストライキ、経営者側の強硬姿勢により大規模なロックアウト騒擾に発展（翌年 1 月まで）
- 11 月 コノリーがアイルランド市民軍を結成
- 11 月 自治への賛成派がアイルランド義勇軍を結成

1914 (49) アメリカ、カナダで講演旅行
詩集『責任』出版

1915 (50) エズラ・パウンドを通じて能を知る
爵位を拒否

1916 (51) 4 月 能の要素を取り入れた舞踏劇『鷹の井にて』をロンドンで
初演、伊藤道郎が鷹役
4 月 イングランド滞在中に復活祭蜂起の勃発を知る
7 月 フランスでモード・ゴンに最後の求婚

1917 (52) バリリー塔購入
夏 モード・ゴンの娘、イスールトに求婚
10 月 ジョージ・ハイド＝リーズと結婚
詩集『クール湖の野生の白鳥その他の詩』出版

1918 (53) 1 月 ロバート・グレゴリー、イタリアで戦死
散文集『月の好意ある沈黙のうちに』出版

1919 (54) 2 月 長女アン誕生
夏期は一家でバリリー塔に滞在するようになる

1920 (55) 1-5 月 アメリカ講演旅行、旅行中ポートランドで佐藤醇造から
日本刀を贈られる
イスールトがフランシス・スチュアートと結婚

「W. B. イェイツとアイルランド」関連年表

7 月 第一次世界大戦勃発（～1918 年 11 月）、アイルランドも英
国の一部として戦争に協力

9 月 第三次自治法案が成立するが、大戦終了後まで施行は棚上
げに

7 月 当初非政治性を謳っていたゲール語連盟が政治・軍事化

4 月 24 日 ダブリンで復活祭蜂起、アイルランド義勇軍、市民軍
の一部が中央郵便局を占拠、5 日後には鎮圧され、指導者の多く
が 4 日～2 週間というわずかな期間のうちに処刑
この頃から分離ナショナリズムが急速に盛り上がる

[2 月、10 月 ロシアで二度の革命、十月革命では内戦が勃発し、
終結後の 1922 年 12 月に初の社会主義国家ソヴィエト連邦が誕生]

12 月 英国総選挙にて多くのシン・フェイン党員が当選

4 月 前年の総選挙で当選したシン・フェイン党員が英国議회를
欠席し、独自のアイルランド議会（ドーイル）を設立

[パリ講和会議、ヴェルサイユ条約締結]

アイルランド独立戦争勃発

「W. B. イェイツとアイルランド」関連年表

- | | |
|---|--|
| <p>1921 (56) 詩集『マイケル・ロバーツと踊り子』『踊り手のための四つの戯曲』出版
戯曲『役者の女王』出演
8 月 長男マイケル誕生</p> <p>1922 (57) 父ジョン、死去（享年 82 歳）
12 月 アイルランド議会の上院議員に任命される（教育、文学、芸術関係）
12 月 ダブリン大学トリニティ・カレッジから名誉博士号授与</p> <p>1923 (58) 11 月 ノーベル文学賞を受賞</p> <p>1925 (60) 独自の歴史観を体系化した『ヴィジョン』を出版
6 月 上院で離婚の規制に反対する演説</p> <p>1926 (61) 5 月 アイルランド自由国の硬貨デザイン委員会議長になる
戯曲『砂時計』など BBC ラジオ放送</p> <p>1927 (62)</p> <p>1928 (63) 詩集『塔』出版
任期切れ、体調不良により上院議員を辞任</p> <p>1929 (64) 夏、バリリー塔に最後の滞在
11 月 マルタ熱で重体に陥る</p> | <p>12 月 アイルランド島北部の 6 州が英国に留まることを認めるなど、いくつかの制限を付けたうえでの独立を定める英愛条約に署名</p> <p>12 月 英愛条約の内容を巡って、アイルランド議会が分裂</p> <p>1 月 アイルランド議会が英愛条約を批准、アイルランド島の南部 26 州から成るアイルランド自由国が成立（北部 6 州と分離）、英自治領の地位を与えられ一定の独立を果たす</p> <p>6 月 英愛条約賛成派と反対派との間で内戦が勃発</p> <p>9 月 自由国初の総選挙、コズグレイヴ政権が誕生する。</p> <p>5 月 内戦が終結</p> <p>9 月 自由国、国際連盟に加盟</p> <p>5 月 エーモン・デ・ヴァレラ率いる条約反対派が政党を結成（フィアンナ・フォイル党）</p> <p>7 月 自由国政府の閣僚ケヴィン・オヒギンズが、条約反対派の中でも強硬、過激な立場をとる IRA によって暗殺される</p> <p>7 月 出版物検閲法成立
[10 月 アメリカ合衆国でウォール街の大暴落、世界恐慌が始まる]</p> |
|---|--|

「W. B. イェイツとアイルランド」関連年表

1931 (65)	12 月 アビー座で『骨の見る夢』上演	12 月 英自治領の立法上の自律性が明文化（ウェストミンスター憲章）
1932 (67)	3 月 レイディ・グレゴリー死去（享年 80 歳） 出版物検閲法への反対を動機に、ショーとともにアイルランド文芸協会を設立 アメリカへ講演旅行	2 月 デ・ヴァレラ率いるフィアンナ・フォイル党内閣が誕生 7 月 英国と輸入関税を相互に引き上げる「経済戦争」が勃発（～1938 年 4 月）
1933 (68)	「ブルーシャツ」団の運動に関心を示すが、7 月に指導者のオーエン・オダフィーと直接出合い、興味を失う	[1 月 ドイツでヒトラー率いる国家社会主義労働者党が政権を掌握] この頃、ファシズムに親近性のある「ブルーシャツ」団が台頭
1934 (69)	シュタイナッハ手術（回春手術）を受ける 戯曲『窓ガラスに刻まれた言葉』出版 マーゴット・ラドックと知り合う	
1935 (70)	戯曲と詩『三月の満月』出版 この頃、ドロシー・ウェルズリーと書簡のやりとり インド人の友人スワミ・プロヒットと『ウパニシャッド』翻訳に取り組む	2 月 避妊具の販売と輸入とが禁止される [10 月 イタリア、エチオピアに侵攻]
1936 (71)	『オクスフォード現代詩撰集』を編集・出版	[7 月 スペイン内戦勃発（～1939 年 4 月）]
1937 (72)	BBC で現代詩についてのラジオ番組を放送 『ヴィジョン』改訂版を出版	6 月 新憲法制定、国名をエーレ（英語では「アイルランド」）とする
1938 (73)	『新詩集』出版 8 月 モード・ゴンと会う（これが最後となる） 『自叙伝』出版 11 月 南仏に向け出発、アイルランドを後にする	6 月 ハイドがエーレ（アイルランド）の初代大統領となる

「W. B. イェイツとアイルランド」関連年表

- | | | |
|------|---|--|
| 1939 | 1 月 28 日 長期滞在中の南フランス、ロクブリューヌで死去(享年 73 歳)
『最後の詩と戯曲 2 篇』及び随筆『汽罐の上で』は死後出版 | 9 月 第二次世界大戦勃発(～1945 年)、エーレ(アイルランド)は中立を宣言(北アイルランドは英国の一部として参戦) |
| 1948 | 9 月 遺体がアイルランドに戻され、イェイツの希望通り「ベン・ブルベンの下」、スライゴー州ドラムクリフの墓地に埋葬 | 12 月 エーレ(アイルランド)が共和制に移行し、英連邦を脱退することを定めたアイルランド共和国法が成立(1949 年 4 月施行) |

作品解説

‘The Stolen Child’ 「さらわれた子供」

初出は *The Irish Monthly* (1886 年 12 月)、そののち *The Wanderings of Oisín and Other Poems* (1889 年) に収録。詩はアイルランドの「取り替え子」伝説（妖精たちが時折人間の世界にやってきて、美しい子供や花嫁をさらっていくという神隠しに似た伝説。その代わりに醜い妖精の子を置いていくことからこう呼ばれる）に取材しており、他にもイエイツはこの伝説に基づいていくつかの作品を発表している。

近代ヨーロッパ各地で起こった文化復興の動きは、18 世紀の『オシアン』ブームに端を発するケルト熱の後押しを受け、19 世紀後半のアイルランドでも大きく花開いた。こうした動きのただ中で詩作を始めたイエイツは、アイルランド、とりわけ自身が幼少期によく訪れたスライゴの伝承をテーマにした作品を発表し始める。当時のイエイツは民話や伝承の収集にも力を注いでおり、1888 年には最初の著作となる *Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry* を上梓する。この本の中でもイエイツは取り替え子伝説に一章を割り、またその章の最後をこの詩で締めくくっている。

伝承民謡を真似て各連の末尾に置かれるリフレイン（「あちらへ行こうよ、人の子よ...」）で、妖精たちはしきりに「この世にはおまえの知らない嘆きがいっぱい」「この世は煩いごとばかり、眠っていても苦労は絶えぬ」とささやいて、人間の子供を拐かそうとする。同じリフレインが3度繰り返されたのち、4 連目でついに家から連れ出された子供が「もう聞かぬ」「もう見ない」のは、「子牛たちが啼く声」や「暖炉棚の薬缶が歌」う様子など、平穏な日常を思わせる音や光景である。リフレインも「子供は来るよ、人の子は...」と変形され、読者の心に不吉な予感を与えたまま、詩は終わる。

言葉たくみに子供を騙して連れ去る妖精たちは確かにまがまがしい存在であるが、その一方で「苺がぎっしり」と「かすめ取った真っ赤なさくらんぼ」の入った樽を隠し持つとされ、鮮烈に感覚を刺激する魅力を持ってもいる。新たな表現世界へ踏み込もうとする詩人の、不安と期待とが縋り交ぜになった胸中を映しているとも考えられる作品である。

【語注】

2 行目「スルース・ウッド」...ギル湖とドロマヘアの間に位置する森。

15 行目「遠い向うのロッシズの岬」...スライゴ北西の岬。砂地が広がる。妖精が現れるという伝説があり、「低い崖の下で眠り込んでしまった当地の人々は目を覚ました時『呆けている』ことがある。というのはシー（注：アイルランドの妖精）がその魂を奪ってしまうからである」とイエイツが述べている。

28 行目「グレン＝カー」...スライゴ北東のグレンカー湖。

‘Down by the Salley Gardens’ 「柳の園に来て」

1889年『オシーンの放浪』所収。「柳の園に来て」は、今ではイエイツの詩としてというよりむしろ、アイルランド民謡の代表的な一曲としてよく知られている。この詩がいつの間にか口伝で歌い継がれてきた伝統歌謡のように民謡のレパートリーの中に加えられてしまったのには、少し複雑な経緯がある。

イエイツ自身の注によれば、当初「歌い直された古い歌 An Old Song Re-Sung」と題されたこの詩は、バリソデアの村の老女がうろ覚えで歌っていた3行の詩をイエイツが書き直したものであるという。実際の歌は、近代になって流通した英語バラッドの一つであったと現在では判明しているのだが、イエイツはこれが「古いアイルランドの詩行」であると思っていたようである。こうして世に出たこの素朴な8行詩は、1909年、作曲家ハーバート・ヒューによって「モーン海岸の乙女」という曲のメロディーに乗せられ、テナー歌手ジョン・マコーマクの歌唱によって人口に膾炙することとなる。面白いことに、1935年にはアイルランド自由国軍がこの歌を行進歌として演奏していた。イエイツ自身が記録しているこのエピソードは、「柳の園に来て」が、この頃にはすっかりアイルランドの伝統的な民謡だと思われていたことを示唆している。

イエイツによって新たに命を吹き込まれたこの詩は、ヒューのみならず多くの音楽家を魅了することとなる。特にイギリスでは、20年代には女性作曲家レベッカ・クラークが、30年代には詩人兼作曲家アイヴァー・ガーニーが、そして43年にはベンジャミン・ブリテンまでもが、それぞれこの詩のために作曲・編曲を行っている。20世紀前半は、芸術音楽においても「民族的」なるものへの関心が高まった時代であり、その対象としてこの歌が何度も選ばれたという事実は、国外においてもこの歌が「アイルランド的」であると見なされていたことの証左であろう。

こうして一世紀近く愛唱されたこの詩からは、次第に詩人イエイツの名前は薄れ、むしろフォークロアとしての土着性がこの詩を彩る最大の特徴となってきたようだ。そのことを象徴的に示すのは、90年代にベルファスト出身のタマリンというバンドがこの歌を歌う際に採用したのが、同じくベルファスト出身の言語運動家ショーン・マキンドラサによってアイルランド語に翻訳された歌詞であったという例である。この詩は、元の歌にせよイエイツのバージョンにせよ、歴史的には間違いなくアングロ・アイリッシュ文化の中で書かれた英語の歌であった。これを、北アイルランドの地でアイルランド語に翻訳し歌うという行為は、広い意味でのアイルランド性というものを現代的文脈の中で歌に見いだそうとする試みとして捉えることができる。

「柳の園に来て」は、音楽との関係において、そのアイルランド性を巡って多様な解釈と変容とを経験してきた。妖精譚をはじめとするアイルランドの口承伝統に関心を抱き続けたイエイツは、自らが世に出した歌がその伝統の一部になっていく過程をどのように見ただろうか。

‘The Lake Isle of Innisfree’ 「湖の島イニスフリー」

「湖の島イニスフリー」は 1890 年 12 月 *The National Observer* 誌に掲載され、その後 *The Countess Kathleen and Various Legends and Lyrics* (1892) に収録された。「韻律に自分なりの音楽があるはじめての叙情詩」とイエイツ自身が評した「湖の島イニスフリー」は、今でも多くの読者に愛され、初期イエイツを代表する作品のひとつとなっている。作品に謳われるイニスフリーは、実在する地名（原語のゲール語 *Inis Fraoigh* は「ヒースの茂る島」の意）で、イエイツが幼少時にしばしば訪れたアイルランド・スライゴ州にあるギル湖に浮かぶ無人島のこと。青年イエイツは、アメリカの詩人 H. D. ソロー (1817-62) の『森の生活 ウォールデン』に影響をうけ、いつか自分もイニスフリーで隠遁生活を送りたいと考えていた。

「湖の島イニスフリー」には、イエイツの望郷心が色濃く表れている。大都会ロンドンに暮らし、孤独とホームシックに苛まれたイエイツは、ある日ふと店先に飾ってある噴水の音を聞き、「ひたひたと岸によせる」イニスフリーの波音を連想する。「心の深い奥底」に響くその波音に衰弱した感性を蘇らせた詩人は、「さあ、立って行こう」と遠く離れた西アイルランドの情景に想いを馳せる。そこで想像されるのは、都会の喧噪を離れ、まるでソローのように「蜂の羽音響く森の空地に一人暮」らす自分の姿である。イニスフリーの住人となった詩人が育てる「蜜蜂」の「蜜」は、ゆっくり「滴り落ちる」「安らぎ」のイメージに重なり、架空の逃避行の甘美さを物語っている。「灰いろの舗道」が続く現実のロンドンとは対照的に、イニスフリーにおける「真夜中は瞬く微光にあふれ、真昼は紫に輝き、夕暮れは紅ひわの羽音に満ち満ちる」と歌われ、追憶の中で心の故郷は色と光に溢れた楽園として立ち現れる。

‘The Wild Swans at Coole’ 「クールの野生の白鳥」

この詩は 1916 年に書かれ、1917 年に雑誌 *Little Review* に掲載された。1916 年は、イエイツにとって一つの分水嶺ともいうべき年であった。この年イエイツは、復活祭蜂起で夫ジョン・マクブライドを亡くしたモード・ゴンに、もう何度目になるかわからないプロポーズをし、さらに彼女の娘のイスールトにまでプロポーズをした。しかしながら、実のところ、彼はゴンへのプロポーズに際し、自らの彼女に対する関心が薄くなっていることに気づいていた。最愛の女性への愛情が儚くも消えかかり、そして気づけば彼は 51 歳という、老年を意識し始める年齢になっていた。周囲の人々は彼に結婚して子孫を残すように強く勧め、1917 年に彼は 32 歳年下のジョージ・ハイド＝リースと結婚する。

「クールの野生の白鳥」は、グレゴリー家の広大な所有地、クール莊園を舞台に、秋の美しさに包まれる湖とそこに浮かぶ白鳥を描いている。乾いた小道に一人佇む詩人と湖上に群れなす白鳥、若き日の「軽い足取り」を失った彼と変わらず「情熱と征服欲」に駆られてお互いを求め合う白鳥の対照は、当時のイエイツを苛んだ情熱の消失への嘆きと老年への強い意識を明確に反映している。

「五十九羽の白鳥」、「十九年目の秋」といった数字へのこだわりには、若き日に傾倒したカバラ（数秘術）の影響があるとも見られ、さまざまな解釈が試みられているが、六十や二十の一步手前のこれらの数には、来るべき、より大きな変化への予感が内包される。季節は枯れゆく秋であり、時間は夕明かりのときである。やがて冬が、夜がやって来て眠りに落ちた詩人が再び「目覚め」るとき、ずっと彼が見つめ続けてきた白鳥は「飛び去っ」ている。その行先はどこなのか。詩人は答えを出さず、詩は疑問文で終わる。暮れかかるクール湖のほとりは、1916 年のイエイツの人生における位置であり、そして歴史的転機にさしかかったアイルランドの位置でもあった。

‘An Irish Airman Foresees his Death’

「アイルランドの飛行士は死を予知する」

初出は、詩集 *The Wild Swans at Coole* (1919)。この「アイルランドの飛行士」とは、レイディ・グレゴリー (1852-1932) の息子であり、イエイツの年少の友人でもあったロバート・グレゴリー (1881-1918) のこと。第一次世界大戦時、グレゴリーは英国航空隊に志願して入隊したが、操縦する戦闘機が友軍のイタリア軍機に誤って撃墜されて命を落とした。わずか 36 歳であった。彼は多方面にわたり才能豊かで、芸術家としても、また乗馬の名手としても名を馳せた。イエイツは、哀歌「ロバート・グレゴリー少佐を偲んで」(1919) において、「兵士にして、学者にして、騎手であった彼」(“Soldier, scholar, horseman, he”) と、いずれの道においても高い完成度を示すルネサンス的万能人であったことを称えている。

本作品では、残された者の視点で死者について語る哀歌の手法とは対照的に、来るべき死を予期しながら戦闘機を操縦する心理を一人称で(つまり、グレゴリー自身の声で)描き出しているのが特徴的である。ただし、この詩に書かれているように、グレゴリーが政治的動機とは無関係に「孤独な歓喜の衝動」から大戦に従軍したのかという点と疑わしいものがある。自ら進んで航空隊に志願したグレゴリーは、むしろ英国の戦争政策を積極的に支持していたと考えられるからである。イギリス連合王国の一部として、アイルランドも大戦に参加しており、ホーム・ルール(憲政の枠内での自治)実現を目指す勢力には、英軍への献身的な協力によって大戦後のホーム・ルール実現をより良い条件下で行おうと考えている者たちも多かった。もちろん「イングランドの危機はアイルランドの好機」と捉えるような人々も(特にリパブリカンと呼ばれる、より完全な独立を目指す人たちの中には)少なくなかったが、アイルランド全体の雰囲気はむしろイギリスに協力的なものだったと言えよう。しかしながら、1916 年の復活祭蜂起以降、アイルランドの世論は英国への協力に反対する方向へと逆転した。このように、大戦への態度を巡ってはさまざまな立場、状況の変化があったのだが、あえてここではそういった政治的な文脈から切り離して、グレゴリー家所領のキルタータン・クロスのみを「私の国」と言い、その貧民たちだけを「同胞」と呼ぶ者として造形されたグレゴリーの姿は、イエイツの追い求めた芸術家像を映しているとも言え、そこに一人称の語りの意味も関わっている。

【語注】

5 行目「クロス」...村もしくは教会教区のこと。^{クロス}十字架が立っていることからこの名がつく。

‘The Fisherman’ 「釣師」

「釣師」は1916年2月に *Poetry* 誌に掲載された後、詩集 *The Wild Swans at Coole* に収録された。この詩の中でイエイツは、伝統的な西アイルランドの釣師の姿を文化的理想の体現者として描く一方で、それとは対照的な現実を苦々しく描いている。この詩の背景となっているのは、イエイツがアイルランド演劇に関わっていく中で直面した、観客の無理解への失望である。1907年、アビー劇場でのJ. M. シング作『西の国の伊達男』の上演を、民衆の描かれ方に憤慨した観客が騒いで妨害した。(*私が愛した死んだ男*)は、シングのことである。) 彼ら都市部の新興カトリック中産階級を、イエイツは偏狭な道徳観と小市民的な価値観に縛られた者たちとして嫌悪した。

その対極としてまるで風景の一部のように描かれる素朴なアイルランド人がこの釣師である。詩人はこの男のような人物を自らの作品の真の読者と定め、詩を書くことを思い描くが、同時に彼が「存在しない」、「一つの夢でしかない」男であることを自覚している。にもかかわらず、この詩にある種の希望と決意が漲っているのは、最終行の「夜明けのように冷たくて情熱にあふれる詩」という表現の中の「夜明け」という語が、新たな始まりを示唆しているからであろう。冷たさと情熱がこの時期以降のイエイツ作品によく見られる(「クールの野生の白鳥」にも登場している) ことを考えれば、この詩は彼が新たに向かう方向を宣言していると言えるかもしれない。

‘Easter 1916’ 「1916 年復活祭」

1916 年 4 月 24 日復活祭の月曜日、アイルランドの自治を求める義勇軍と市民軍の若者たちが武器を持ってダブリン市内の中央郵便局に立てこもり、イギリスからの独立を宣言した。十分な準備もないまま企てられたこの武力蜂起はわずか 5 日でイギリス軍に鎮圧される。反乱のリーダーたち 15 人は逮捕され、軍法会議にかけられて次々と銃殺された。アイルランド史上に名高い「復活祭蜂起」の顛末である。

このときイエイツは戯曲『鷹の井戸』上演のためにロンドンに滞在していたが、蜂起の知らせを聞いて強い衝撃を受けた。逮捕された反乱者たちのうち、パトリック・ピアスやトマス・マクドナ、そしてコンスタンス・マーキエウィッツは親しい知人であったからだ。またジョン・マクブライドは恋人モード・ゴンの別居中の夫だった。「これほど深く心を動かされた公の出来事はなかった」とイエイツはレイディ・グレゴリーへの手紙に書いている。イエイツはホーム・ルール（自治）成立を待たずに武力蜂起に走った「彼ら」を強引で忍耐力に欠けると感じながら、祖国の独立を実現させようと身を投げ出したその行為を責めることもできない。信念のために心が石になった「彼ら」の姿は自分自身の生き方にも重なるのである。

1 連と 2 連では「彼ら」のダブリンでの日常が描かれ、そこにイエイツも登場する。彼は、ナショナリズム運動を展開するうえでだんだんと排他的になり、武力行使も辞さないという構えすら見せはじめていた「彼ら」に対してはやや距離を置き、「丁寧なありきたりの言葉」を口にしていたのである。3 連では場面が一転し、石に姿を変えた「彼ら」が自然の風景の中に置かれ、そこで「彼ら」の行為と時間の流れが対比される。この景色の「真ん中」にいて歴史の流れを乱している「彼ら」であるが、果たしてこれで本当に流れを変えることができるのか。それともやがて自然の一部として埋没してしまうのか。蜂起に対して複雑な思いを抱きながらも、祖国のために命を捨てた若者たちの名前を刻み込んで記念碑とするかのように、最終連でイエイツは「彼ら」の名を力強く呼び上げる。不安と感動がまじりあう「恐ろしい美が生まれた」のリフレインが重く響いている。

この復活祭蜂起が引き金となって、アイルランド独立戦争が勃発した。その後 1921 年にアイルランドをイギリス帝国統治下の自治国と認める英愛条約が締結されたが、その是非をめぐって壮絶な内戦が起き、多くの犠牲者を出した。本作品は最後の日付が示すように復活祭蜂起の 5 ヶ月後に完成したが、当初は様々な事情から正式には発表されず、私家版として作られた 25 部が親しい知人たちに配られただけだった。公表されたのはそれから 4 年後の 1920 年で、雑誌 *New Statesman* においてである。

【語注】

17 行目「あの女」…コンスタンス・マーキエウィッツ。裕福なアングロ・アイリッシュの出身。復活祭蜂起ではいったん死刑を宣告されるが、女性であることから減刑された。のちに自由国議員となる。

24 行目「この男」…パトリック・ピアス。私立学校 St. Enda's School を運営。詩人でもある。蜂起では中央郵便局前で独立宣言書を読み上げた。イギリス軍により銃殺される。

26 行目「こちら」…トマス・マクドナ。詩人、劇作家。ピアスの学校運営に協力し、また National University

で講師として文学を教えた。イギリス軍により銃殺される。

31 行目「このもう一人の男」…ジョン・マクブライド。別居中だったモード・ゴンの夫。ボーア戦争の勇者として知られた。イギリス軍により銃殺される。

68 行目「約束を守るかもしれない」…イギリスがアイルランドの自治権を承認することを意味する。法案は戦争前に議会にかけられていたが、戦争勃発とともにその処理が止まっていた。戦争が終わり次第成立するはずだった。

76 行目「コナリー」…ジェームズ・コノリー。労働者階級出身でアイルランドの社会主義運動の指導者。蜂起の戦闘中に重傷を負ったため、椅子に縛りつけられて銃殺された。

‘Sailing to Byzantium’ 「ビザンティウムへの船出」

「ビザンティウムへの船出」は、1927 年出版の自選詩集 *October Blast* に含まれた後、翌年発表の *The Tower* に再録された。この時イエイツは 63 歳。活力の減退に悩まされながらも、*A Vision* (1925) で展開した独自の思想体系を詩作で実践しようと野心に燃えていた。そんな葛藤から生まれた詩のひとつが「ビザンティウムへの船出」であり、非常に完成度の高い作品として評価されている。ビザンティウムは東ローマ帝国の旧首都であるが、実際にイエイツがこの地を訪れたことはない。むしろビザンティウムは、イエイツが言う「宗教的生活・芸術的生活と日常生活」の調和を体現した芸術的境地を象徴している。

ビザンティウムへの「亡命」をイエイツに希求させたのは、老衰そして死への恐怖であろう。詩の前半部で、イエイツの分身である老人は若者が興じる「官能の音楽」からの疎外を意識し、自らを半ば自嘲的に「棒切れに引っかけたぼろ上衣」と呼ぶ。しかし、老齢は一方で生に対する深い洞察を与える。刹那の享楽に耽溺する若者は、「死んで殖える」だけであり、より恒久的な創造を担えるのは「不老の知性の記念碑」を建てる術を知る芸術家だけなのである。そうして老人は「官能の音楽」を超越する「魂の歌の教師」を探すべく、「聖なる都ビザンティウム」へと出航するのだ。

後半部では芸術的創造を巡る哲学的な議論が展開されるが、その中核を担うのが「渦」または「ガイアー (gyre)」のモチーフである。これは、先述の *A Vision* の思想体系を図像化したもので、対立しつつも影響し合い、それにつれて変化し続ける思想や歴史観を表している。この詩では自然と芸術が対置されており、老人がモザイクの賢者たちに向かい「永遠の工芸品に変えてくれ」と懇願するのも、ひとえに自分の体を「死にかけた動物」たらしめる自然界の秩序から逃れたいがためである。願いが叶い、金細工師たちの手によって黄金の鳥へと生まれ変わった詩人は、不老不死を手にする。しかし、黄金の鳥はもはや飛び立つことができず、未来永劫その場にとどまり続けて「貴族や貴婦人」のために歌うことにもなる。その両義的な姿には芸術と人生に対するイエイツの複雑な心象が表れている。

‘In Memory of Eva Gore-Booth and Con Markiewicz’

「イヴァ・ゴア＝ブースとコン・マーキエウィッツの思い出に」

初出は *The Winding Stair and Other Poems* (1929)。題名の ‘in memory of ...’ には「～を偲んで」という意味があり、この作品はゴア＝ブース家の姉妹についてのエレジー（哀歌）となっている。

イエイツは少年期からスライゴーにある母方のボレクスフェン家に何度か滞在しており、近郊のリサデルにある大地主ゴア＝ブース家の邸宅や姉妹を見かける機会もあったが、ボレクスフェン家は裕福とはいえ商人の身分であり、社会的地位の差による壁は高かった。だが 29 歳の時、文壇に躍り出たイエイツはこの邸宅に招かれている。彼はその訪問を振り返って妹イヴァの「繊細で^{ガゼル}羚羊のような美しさ」を称え、求婚すら考えるほど惹きつけられたことを明かしている。その一方で当時イエイツはまだモード・ゴンに思いを寄せていたのだが、姉コンスタンスの方はそのモードに驚くほど似ていたという。

本作品の前半で詩人は、姉妹が政治活動に身を投じたことが、彼女たちの美しさを台無しにするものでしかなかった、とその虚しさを語っており、性役割について保守的だったイエイツの姿が窺える。イエイツは 1922 年のアイルランド自由国誕生とともに上院議員に任命され、新生政府寄りの立場にあったこともあり、敵対的な姉の活動に対しては「無知蒙昧のやからと陰謀をたくら」んだ、とにべもない。

「ジョージ風」のリサデルの邸宅は「私ら」、すなわちイエイツやゴア＝ブース家の属する、かつての支配階級だったアングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) と連想されるものである。イエイツは、アイルランドで「近代以降の多くの文学をつくり、政治において最も優れた人々をつくりあげてきたヨーロッパの偉大な種族のひとつである」*アングロ・アイリッシュであることに誇りを持っていた。いざ独立アイルランドが誕生すると、圧倒的に少数派となった彼らはイギリス支配の残滓としてしばしばその存在を糾弾された。詩人は燃えさかる炎と「展望楼」とを併置しているが、これは実際にアングロ・アイリッシュの邸宅が燃やされる事件が多発していたことを背景としている。

「時間」を燃やすよう命じてくれ、と姉妹に乞う詩人は、自分たちが作り上げてきた時代に幕を引き、また新たな時が生まれることを望んでいるのだろうか。「賢者たち」を喚び出しその力に期待する詩人には、アイルランドの偉大な時代を担ってきたという自負と同時に、その地で作り上げてきたものを自ら否定するような両義的な態度も見える。

*1925 年 6 月 11 日、アイルランド上院でのイエイツの発言

【語注】

1 行目「リサデル」…スライゴー近郊の地名で、ゴア＝ブース家の邸宅があった。

4 行目「一人はまるで羚羊だ」…妹のイヴァ・ゴア＝ブース (1870–1926) のこと。姉ほど過激ではなかったが、婦人労働者の権利のために活動した。

7 行目「姉」…姉は結婚してコンスタンス（「コン」）・マーキェウィッツ（1868–1927）となり、女性参政権運動、労働組合運動やアイルランド独立運動の担い手となった。特に 1916 年の復活祭蜂起では主導的な役割を果たし（「1916 年復活祭」参照）、死刑を宣告されたが恩赦を受けている。アイルランドの部分的独立を定める 1921 年の条約に際しては、不十分だとして反対派に回り、新生政府に敵対した。

本作品でのイエイツはマーキェウィッツの政治活動について批判的だが、彼女の政治的功績は大きく、女性の地位向上においても先駆的な役割を果たした。1918 年にはイギリス下院初の女性議員になっているし、1919 年にアイルランドが一方的に「アイルランド共和国」の独立を宣言した際には労働大臣に任命されている。「共和国」は世界的に認められず、独立の認知は 1922 年の自由国誕生を待たねばならなかったが、これを国家に数えるならば、マーキェウィッツはヨーロッパ初の女性閣僚でもあったことになる。おそらく、結婚後ダブリンで生活し、貧しい労働者の非人道的な環境を目にしたことが人生上の転機になったのだと言えよう。自由国誕生後も、亡くなるまでダブリンのスラム街の環境改善に尽力した。

16 行目「ジョージ朝風の屋敷」…18 世紀頃の建築を指す用語で、1832 年に建築されたりサデルの邸宅は厳密にはこの範疇に含まれないが、その様式が似ているのでこう呼んでいる。

‘Byzantium’ 「ビザンティウム」

「ビザンティウム」の初出は1932年の詩集 *Words for Music Perhaps and Other Poems*。翌年 *The Winding Stair and Other Poems* に再録された。1929年の暮れにマルタ熱にかかったイエイツは、数ヶ月の間病床生活を余儀なくされた。「ビザンティウム」はそんな折に執筆され、イエイツ曰く「自分を生き返らせてくれた」詩だった。創作の契機となったのは、友人トマス・スタージ・ムア(1870-1944)の苦言である。「ビザンティウムへの船出」を読んだスタージ・ムアは、最後の連に現れる黄金の鳥のモチーフの拙さを指摘し、これを受けたイエイツは「ビザンティウム」で作風の練り直しを図る。「ビザンティウムへの船出」の続編として位置づけられる「ビザンティウム」だが、以前のテーマが複雑なイメージのもとで変奏され、難解な作品となっている。

第1連では、再びビザンティウムの大聖堂が登場し、「人間存在のすべて」を高みから「蔑視する」その「円屋根」は、「ビザンティウムへの船出」で劇化された自然と芸術の対立を想起させる。しかし、「ビザンティウム」の主題となるのは人間そのものではなく、人間の「血の狂暴と汚辱」が象徴する「錯雑」である。その「錯雑」を浄化するためには、象徴的な死を通じた再生が必要であることが第2連で示唆される。「冥府の糸巻」は「ビザンティウムへの船出」の「渦」を連想させ、この作品の「ガイアー」として「生の中の死、死の中の生」の対極を表していると言える。第3連では再び黄金の鳥が現れるが、冥府の使者としての鳥は自然と芸術どちらの産物でもない「奇跡」であり、大聖堂同様生の「錯雑」を「声高らかに軽蔑」する。

黄金の鳥が「生の中の死」を皮肉っているのなら、次の第4連で描かれるのは反対に「死の中の生」である。「血から生れた霊たち」は人間の特性を残しており、「炎から生れた炎」に灼かれることによって、ようやく「狂乱の錯雑」から解放される。クライマックスでは、超自然的な光景が展開し、天界の使者である「海豚」が蘇った霊たちを楽園へと運ぶ。海豚と共にビザンティウムに押し寄せる「潮」は創造的破壊の源泉となる生の活力を象徴し、まるで詩中の対立や矛盾を一気に押し流すかのようだ。

‘Lapis Lazuli’ 「ラピス・ラズリ」

初出は *London Mercury* (1938) 及び *New Republic* (1938)。イエイツの友人であったハリー・クリフトンはイエイツ 70 歳の誕生日を祝って、貴石ラピス・ラズリ（瑠璃）でできた中国の古い彫刻品を贈った。青いラピス・ラズリには山を登ろうとするふたりの中国人と楽器を持つ召使いの姿が彫り込んであった。その彫刻に着想を得て書かれた詩がこの「ラピス・ラズリ」である。

この詩が書かれたのは 1936 年、スペイン内戦が始まり、またヒトラー率いるドイツがラインラントに侵攻した年である。第一次大戦の記憶がいまだに生々しく、また新たに迫り来る戦争の脅威がヨーロッパを暗く覆っていた時代だった。

過去の大事件を思い出して不安になった女たちが陽気な芸術を非難するが、それに対してイエイツは悲劇を演じる者はいつも陽気なのだという。人類の長い歴史において古い文明は何度も戦争によって崩壊し、人知も優れた芸術作品も失われたが、そのたびにまた新しい文明が構築されてきた。古いラピス・ラズリの中国人たちもまたそのような歴史の渦中にある者たちだが、彼らは陽気に山に登り、山頂から悲劇を見つめて音楽を奏でさせたのである。このような態度を彼は「悲劇の陽気さ (tragic gaiety)」と呼び、それがシェイクスピアの悲劇によく表わされていると考えた。ハムレットやオフィーリアを演じる役者は悲劇を演じるさなか、悲しみのために舞台上で泣き出して台詞が言えなくなることはないのである。芸術家は悲劇的な状況にヒロイックに向かうべきであると考え、イエイツの信念が表明されている作品である。

文明が壊され、また構築されるという歴史観は著書 *A Vision* をはじめ多くの作品に表現されている。また緊張がみなぎる西洋に対して東洋は同じ悲劇を静かに見つめており、その対照にイエイツの文明観が示されている。

【語注】

6 行目「ツェッペリン」…第一次世界大戦でドイツ軍が使った飛行船。イギリスへの爆撃に使用された。

7 行目「ビリー王」…17 世紀末のプロテスタントのイギリス王ウィリアム三世のこと。アイルランドに攻め入ってカトリックの前王ジェイムズ二世の軍を破り、国を制圧。これ以降プロテスタントのアセンダンシーを中心とする体制が始まった。

29 行目「カリマコス」…紀元前 5 世紀のギリシアの彫刻家。 *A Vision* にも言及がある。

‘The Municipal Gallery Revisited’ 「市立美術館再訪」

初出は *A Speech and Two Poems* (1937)。70 歳を超えたイエイツが、市立美術館の絵画の中で自己とアイルランドの来し方を顧みている。

ある講演でイエイツはこの時の訪問について、「[絵に囲まれて] 座った私は、数分の後、湧き上がる感情に襲われた」と述べている。独立前後のアイルランド史の主役、脇役たちの絵を見ながら、詩人はこれらが「死んでしまったアイルランドではない。詩人たちが思い描いてきたアイルランドだ」と感じ、「湧き上がる感情」に打ちのめされ、立ち止まる。目を閉じ、落ち着きを取り戻した脳裏に思い浮かんでくるのは、レイディ・グレゴリーをはじめとする仲間たちだった。

イエイツはかつて自分たち、すなわちこの国の良き部分を担ってきたと詩人が自負するアングロ・アイリッシュが、文芸復興運動で理想のアイルランド像として示してきた映像に思いを馳せる。それは「恐ろしくそして陽気な」アイルランドだ。「恐ろしい」‘terrible’ そして「陽気な」‘gay’ という語はイエイツがアイルランドを表現する際によく用いている（それぞれ「1916 年復活祭」、「ラピス・ラズリ」参照）。だが詩人は素晴らしい絵画に胸を打たれる一方で、そうして描いた理想像がこれからアイルランドの地で完璧に実現されることはないだろう、と感じる。

イエイツが初めてレイディ・グレゴリーの邸宅を訪れた時（1896 年）、子の無かった彼は、いつか自分の子がこの地に「深く根を下ろしたもの」を見出すだろうと期待していた。しかし、その期待は裏切られてしまった。現実の独立アイルランドは、彼の思い描いたものとはほど遠かったのである。だがアングロ・アイリッシュとしての詩人の矜持が失われることはない —— 今ある「キツネたち」、すなわち「取るに足らない人々」が、偉大な「アナグマ」たちのありし日の功績を汚すことなどできないのだから（この表現の背景として、イエイツが優生学に傾倒していたことも指摘せねばならない）。

ところで、アイルランドのノーベル賞詩人、シェイマス・ヒーニーは、イエイツが亡くなったわずか数ヶ月後に誕生したということもあり、後継者と見なされることが多いが、ノーベル賞受賞式典でこの詩に言及しており、最後の二行を引用している。イエイツらしからぬ率直で感傷的とも言える一節だ。そしてイエイツその人が 1923 年、ノーベル賞受賞の際に名前を挙げたのが、詩人の庇護者であったレイディ・グレゴリー、そして J. M. シングだった（「二人が横にいるかのようなだった」と受賞講演について述懐している）。実際に、この二人をはじめとした仲間たちと出会い、独立に向かうアイルランドの文芸復興運動に尽力したからこそ、イエイツはひとりの偉大な文人として歴史上に名を残すことができた。詩人の栄光が「この友人たちを持ったことだったのだ」という時、それはただ感傷に浸っているのではなく、まさに歴史上の事実だったのである。

そしてイエイツの栄光に欠かせなかったのはこの地アイルランドだった。詩人は二人とともにアイルランドの地に足を付け、この地の豊かさを芸術の力で花開かせようとしてきた。二年後に世を去ることになる詩人は、最後までアイルランドのことを考えていたのだ。大地から足を離したときに死すべきものとなった、巨人アンタイオスのように。

【語注】

題名「市立美術館」…「ダブリン市現代美術館」として、本作品中にも登場するヒュー・レーン（1875–1915）によって設立された。その後「ダブリン市ヒュー・レーン美術館」となって現在に至る。

1 行目「三十年分」…この美術館は 1908 年に設立された。

2 行目「待ち伏せる兵。水辺の巡礼者たち。」…前者は復活祭蜂起（1916 年）の直後の時期、アイルランド独立を目指して戦う農民兵。後者はアイルランド北部ドニゴール州のダーク湖の巡礼者たちを描いたもの。湖上にはステーション島という小島が浮かんでおり、カトリック教徒の重要な巡礼先。

3 行目「裁かれるケースメント」…ロジャー・ケースメント（1864–1916）は復活祭蜂起で用いるための武器を入手すべくドイツと交渉に当たっており、叛逆罪によって 1916 年に処刑されている。

4 行目「グリフィス」…アーサー・グリフィス（1871–1922）は 20 世紀初頭からアイルランド独立運動を率いた政治指導者で、アイルランド自由国成立を定める英愛条約の交渉ではアイルランド側の代表者を務めた。本作品にも登場するシングの戯曲『西の国の伊達男』上演に際して、その内容がアイルランド農民を冒涇するものだとして激しく抗議した人物でもあり、イエイツは両義的な評価を与えている。

5 行目「ケヴィン・オヒギンズ」…オヒギンズ（1892–1927）はアイルランド自由国成立時に副首相に当たる地位について独立初期のアイルランドを支えるため尽力したが、1927 年に反対派に暗殺された。イエイツは彼を知性的な人物として高く評価していた。

8～10 行目「革命の戦士〔中略〕修道院長か大司教」…橙、白、緑の三色旗は 1922 年にアイルランド自由国が成立すると国旗として採用された。アイルランド独立（＝「革命」）を目指す武装運動は当初カトリック教会の支持を受けられなかったが、1920 年作のこの絵画は、政治と宗教とが一体となって独立に向かっているさまを象徴的に描いている。

11 行目「死んでしまったアイルランド」…イエイツは「1913 年 9 月」（1913）という作品で「ロマンあるアイルランドは死んでしまった」と述べている。

13 行目「一人の女性」…ベレズフォード夫人を指すのではないかと推測されているが、明確にしないことでイエイツの生涯の理想の女性、モード・ゴンのことをも思わせる。

21 行目「オーガスタ・グレゴリーの息子」…ロバート・グレゴリー（「アイルランドの飛行士は死を予知する」参照）。

22 行目「『唯一の生みの親』」…ウィリアム・シェイクスピアの『ソネット集』の献辞から表現を借りている。

23 行目「ヘーゼル・レーヴァリー」…画家ジョン・レーヴァリーの妻で、彼女がモデルとなったジョンの作品は数多い。1935 年に亡くなった。

25 行目「マンチャーニによるレイディ・グレゴリーの肖像画」…イタリア出身の画家、アントニオ・マンチャーニ（1852–1930）による作品。

- 26 行目「ジョン・シング」...ジョン・ミリントン・シング（1871-1909）はアイルランドの劇作家。（「釣師」参照。）
- 34 行目「あの名誉が長く住み着いてきた家」...グレゴリー家のクールの邸宅。
- 39～40 行目「どんなキツネにも～人々の言葉から生まれた映像だ。」...イエイツはイングランドの詩人、エドモンド・スペンサー（1552-1599）について小文をものしたことがあったが、そこでスペンサーがその庇護者であったレスター伯の死に際して詠んだ詩（「時間の廃墟」）について次のように述べている。「[スペンサーは] 取るに足らない男たちが伯爵の代わりに死ぬべきであると述べ、そうした男たちを『アナグマの掃き清めた』ねぐらに隠れるキツネ（汚い動物）になぞらえている。」イエイツが英文学の偉大な先人と見なしていたスペンサーだが、アイルランド制圧において主導的な役割を担った人物でもある。
- 44 行目「アンタイオス」...ギリシア神話に登場する巨人の姿をした神。ポセイドンとガイアの息子。大地と接触している間是不死身だが、弱点を見抜いたヘラクレスに持ち上げられ、絞め殺されたという。

‘Why should not Old Men be Mad?’

「老人どもが怒り狂わずにいられるか？」

初出は、小冊子 *On the Boiler* (1939)。イエイツ最晩年の作品である。*On the Boiler* は優生学に共感する発言が見られるなど、全体的に論議を呼ぶ内容となっているが、人生が期待通りにはいかないものであることを声高に主張して怒り狂う（もしくは、正気を失った）この詩の老人は、*On the Boiler* の挑発的な内容全体を自己劇化の枠組みに取り込んで興味深い。

当初の幸福な状態から変調をきたした例として紹介されている三人のモデルについては、イエイツの周辺人物の中から見つけ出すことができそう。まず、「酒食らいの新聞屋」についてははっきりとはしないものの、一節には『アイリッシュ・タイムズ』紙の編集者であった R. M. スマイリーではないかと言われている。次の「一冊残らずダンテを読み通した娘」は、モード・ゴンとフランス人革命家ルシアン・ミールヴォワとの間の子、イスールト (1894–1954) のこと。イエイツは、モード・ゴンだけでなく母親似であった娘イスールトにも求婚し拒絶されている。イスールトは、1920 年に小説家にして詩人のフランシス・スチュアート (1902–2000) と結婚した。このスチュアートこそが、ここで「馬鹿」呼ばわりされている人物である。そして三番目の、トロイ戦争の元凶となった美女ヘレネにたとえられている人物はモード・ゴンと考えられるが、コンスタンス・マーキエウィッツも想起させる。二人は外見がよく似ており、またイエイツの期待に反してアイルランドのナショナリズム運動に身を投じたという共通点を持っている。この一篇から浮かび上がってくるのは、晩年に至るまでゴン母娘がイエイツの心を乱し続けたということであり、それが老人イエイツの怒りの主因だと言えるのかもしれない。こうしたきわめて個人的な感情と自己劇化との間の往復運動がイエイツ詩の特徴のひとつでもある。

‘The Circus Animals’ Desertion’ 「サーカスの動物たちは逃げた」

初出は *Atlantic Monthly* 及び *London Mercury* (1939)。亡くなる 1-2 年前に書かれた作品である。

自分にはもう新しい詩想が生まれないと嘆く老詩人イエイツは、せめて古い作品を振り返ろうと過去の三作品をあげてコメントする。彼が選んだ作品とは、20 代の頃に書いた長編詩『アシーンの放浪』、30 代の戯曲『キャスリーン伯爵夫人』と同じく戯曲の『バリアの岸で』で、短詩がひとつも入らない意外な選択である。しかしイエイツ自身によるコメントを見ると、どの作品も <飢餓> に関係があることがわかる。『アシーンの放浪』では異性への思いが ‘starved’ (飢えた) と表現されており、『キャスリーン伯爵夫人』は飢饉で飢えた人々を救うために魂を悪魔に売る伯爵夫人の話であり、『バリアの岸で』は主人公の英雄クーフリンの「影」と考えられる <道化> が空腹に苦しんでいる。これらの作品の表面下には作者イエイツが抱える精神の飢餓感があるといえるだろう。

自分は夢そのものに魅了されていたと告白するイエイツ。夢に憧れたために完璧な美しさを持つイメージたちが生まれたが、やがて詩人は自分が創り出したイメージたちに支配されるようになる。しかし老いた今、それら美しいイメージとは実は心の中にあった粗末なガラクタだったと詩人は気づいたのだ。サーカスのメンバーたちは旅立ち、かつて憧れた気高く美しい世界への梯子ははずされた。彼は飢餓感を抱えたままで地面に横たわろうと決意するのである。

詩が書けないと嘆くことを主題として詩を書くことは、英文学では古くから行われて来た。もう書けないと嘆いてみせる詩人にはまだまだ創作力が残されている。「古い薬缶、古い空き瓶、ひしゃげたブリキの缶」とリズミカルにガラクタを並べたて、自分は店先の地面に横たわろうと言うイエイツだが、その横たわる姿勢は、アイルランド人がしばしば行った抵抗の行為であるハンガー・ストライキにも似て、一見あきらめているようだが実は最後まで闘おうとする姿勢なのである。事実、イエイツはその人生の最後の数年間に驚くほど豊かな創作活動を示すのであり、最晩年の本作品も彼の傑作のひとつに数えられている。

【語注】

10 行目「アシーン」... 『アシーンの放浪』(1889)は、イエイツ唯一の長編詩。ケルト神話の英雄アシーンが妖精の王女ニーアヴに誘われて三つの島を放浪する。再びフェニアン¹の国に帰ってみると、三百年の歳月が過ぎていた。

18 行目『キャスリーン伯爵夫人』...1892 年の作品。過去の飢饉の時代、ある伯爵夫人が飢えに苦しむ農民たちを救うために自分の魂を悪魔に売り渡すが、最後には許されて天に迎えられる。

25 行目「<道化>と<盲い>」...『バリアの岸で』(1904) で、ケルト神話の英雄クーフリンは大王コナハーのたくらみにより、それと知らずに自分の息子と戦って殺してしまう。真実を知ったクーフリンは狂って海の波に永遠の戦いを挑む。クーフリンとコナハーに対する<影>の存在として、<道化>と<盲い>が登場する。

参考図書

—— イエイツとアイルランドについてもっと知りたい方のために

イエイツ作品

Yeats, W. B. *Autobiographies*. Ed. William H. O'Donnel and Douglas N. Archibald. New York: Scribner, 1999.

——. *A Vision*. Ed. Catherine E. Paul and Margaret Mills Harper. New York: Scribner, 2008.

——. *The Collected Poems of W. B. Yeats*. Ed. Richard Finneran. New York: Scribner, 2007.

——. *The Early Essays*. Ed. George Bornstein and Richard J. Finneran. New York: Scribner, 2007.

——. *The Plays*. Ed. David Clark and Rosalind Clark. New York: Scribner, 2001.

——. *Collected Letters of W. B. Yeats*. (vols. I–IV) Ed. John Kelly. Oxford: Clarendon Press, 1986–.

イエイツ, W. B. 『イエイツ エリオット オーデン』(筑摩世界文学大系 71), 平井正穂, 高松雄一編, 筑摩書房, 1975.

——. 『イエイツ戯曲集』, 佐野哲郎他訳, 山口書店, 1980.

——. 『対訳イエイツ詩集』, 高松雄一訳編, 岩波書店, 2009.

——. 『W. B. イエイツ全詩集』, 鈴木弘訳, 北星堂書店, 1992.

イエイツ伝記ほか

Brown, Terence. *The Life of W. B. Yeats*. Oxford: Blackwell, 1999.

Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life, I. The Apprentice Mage*. Oxford: Oxford UP, 1998.

——. *W. B. Yeats: A Life, II. The Arch-poet*. Oxford: Oxford UP, 2003.

杉山寿美子 『アベイ・シアター 1904–2004 —— アイルランド演劇運動』, 研究社, 2004.

イエイツ作品の注釈・解説

Holdeman, David. *The Cambridge Introduction to W. B. Yeats*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Howes, Marjorie, and John Kelly. Eds. *The Cambridge Companion to W.B. Yeats*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Jeffares, A. Norman. *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats*. New and Revised Edn. New York: Macmillan, 1984.

鈴木弘編 『イエイツ詩辞典』, 本の友社, 1994.

イエイツ批評

Bloom, Harold. *Yeats*. New York: Oxford UP, 1970.

Cullingford, Elizabeth Butler. *Gender and History in Yeats's Love Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

- Deane, Seamus. *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature, 1880–1980*. London: Faber and Faber, 1985.
- De Man, Paul. *Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984.
- Ellmann, Richard. *The Man and the Masks*. London: Faber, 1961.
- Hassett, M. Joseph. *Yeats and the Muses*. Oxford: Oxford UP, 2010.
- Howes, Marjorie. *Yeats's Nations: Gender, Class, and Irishness*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Kermode, Frank. *Romantic Image*. London: Routledge, 1961.
- Kinahan, Frank. *Yeats, Folklore, and Occultism: Contexts of the Early Work and Thought*. Boston: Unwin Hyman, 1988.
- Melchiori, Giorgio. *The Whole Mystery of Art: Pattern into Poetry in the Work of W. B. Yeats*. London: Routledge, 1960.
- Murray, Christopher and Masaru Sekine, et al. *Yeats and the Nob: A Comparative Study*. Gerrards Cross: Smythe, 1990.
- Ramazani, Jahan. *Yeats and the Poetry of Death: Elegy, Self-elegy, and the Sublime*. New Haven: Yale UP, 1990.
- Said, Edward. 'Yeats and Decolonization', *Culture and Imperialism*. New York: Knoph, 1993.
- Vendler, Helen. *Our Secret Discipline: Yeats and Lyric Form*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2007.
- 池田寛子『イエイツとアイリッシュ・フォークロアの世界 —— 物語と歴史の交わる
ところ』, 彩流社, 2011.
- 出淵博『イエイツとの対話』(出淵博著作集1), みすず書房, 2000.
- 鈴木聡『終末のヴィジョン —— W. B. イエイツとヨーロッパ近代』, 柏書房, 1996.

アイルランド文学

- Brown, Terence. *The Literature of Ireland: Culture and Criticism*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture*. London: Verso, 1995.
(邦訳 テリー・イーグルトン, 鈴木聡(訳)『表象のアイルランド』, 紀伊國屋書店, 1997.)
- Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation*. London: Jonathan Cape, 1995.
——. *Irish Classics*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2001.

アイルランド史

- Beckett, J. C. *The Making of Modern Ireland 1603–1923*. 2nd Edn. London: Faber and Faber, 1981.
- Bew, Paul. *Ireland: The Politics of Enmity, 1789–2006*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History, 1922–2002*. London: Harper Perennial, 2004.
(邦訳 テレンス・ブラウン, 大島豊(訳)『アイルランド —— 社会と文化
1922～85年』, 国文社, 2000.)
- Ferriter, Diarmaid. *The Transformation of Ireland 1900–2000*. Dublin: Profile Books, 2004.
- Fitzpatrick, David. *The Two Irelands, 1912–1939*. Oxford: Oxford UP, 1998.

- Foster, R. F. *Modern Ireland, 1600–1972*. London: Allen Lane, 1988.
- . Ed. *The Oxford Illustrated History of Ireland*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Lee, J.J. *Ireland 1912–85: Politics and Society*. Cambridge; New York: Cambridge UP, 1989.
- Lyons, F.S.L. *Culture and Anarchy in Ireland, 1890–1939*. Oxford: Clarendon UP, 1978.
- . *Ireland since the Famine*. 2nd Edn. London: Fontana Press, 1985.
- Moody, T. W. and F. X. Martin. *The Course of Irish History*. 4th Edn. Lanham, MD: Roberts Rinehart, 2001. (邦訳 T.W. ムーデー, F.X. マーチン (編著), 堀越智 (監訳) 『アイルランドの風土と歴史』, 論創社, 1987.)

ウェブサイト

- CELT (Corpus of Electronic Texts): On-line Resource for Irish History, Literature and Politics
<<http://www.ucc.ie/celt/>>.
- The Life and Works of William Butler Yeats: On-line Exhibition (National Library of Ireland)
<<http://www.nli.ie/yeats/>>.
- Yeats Society Sligo <http://www.yeats-sligo.com/summer_school>.

2012 年 5 月 12 日発行

東京大学イエイツ研究会編

*この研究会は、東京大学大学院の在学生、修了生で構成するイエイツ文学の研究会です。

今回の展示に参加したメンバー：

五十嵐奈央、井上和樹、小野瀬宗一郎、柿原妙子、加太康孝、
鈴木哲平、田代尚路、八谷舞、山本毅雄、渡邊秀介

監修 中尾まさみ 東京大学大学院総合文化研究科教授

